

『裁判実務フロンティア 家事事件手続』

矢尾和子, 大坪和敏 編
秋山里絵, 木下真由美, 倉持政勝, 国分貴之, 本多智子, 町田健一 著
有斐閣 3,300円(本体)

家事事件の実務について理解を深める良書

会員 小寺 瑛子 (65期)



1 本書について

本書は、平成25年の家事事件手続法施行後の新たな実務に関し、4つの架空のエピソードの中で各種手続の主張立証のポイント等について詳細な解説を行った書籍です。

本書は、家事事件手続法施行当時に東京家裁に在籍されていた3名の裁判官と、家事調停官や弁護士会の委員会等のメンバーとして家事事件の運用に関わってきた5名の弁護士により、議論を重ねた上で執筆されました。編者は、2018年6月現在、東京地方裁判所所長代行（東京簡易裁判所司法行政事務掌理者）を務める矢尾和子裁判官と、2017年3月まで司法研修所の教官（民事弁護）を務めるなど、幅広く活躍されている大坪和敏会員です。

本書のエピソードの前半2つは離婚の事例であり、後半2つは相続の事例です。いずれも弁護士として扱うことが多い種類の事件が取り上げられています。相続に関する事例の中では、成年後見の申立てや遺言書の作成といった、紛争を予防する見地から必要となる実務についても解説されている点が特徴の一つです。

2 本書の感想等

(1) 臨場感のある物語部分

本書のエピソードは、物語部分、解説部分、及びコラム部分で構成されています。

各エピソードでは、初回の相談から事件解決まで最大で14ものシーンを設け、時系列に沿って、各当事者又は裁判所の立場でストーリーが展開されます。そして各シーンで登場する当事者の言い分等は、非常によく練られており臨場感があります。

特に、依頼者との打ち合わせや調停期日における対話

形式でのやりとりの場面では、代理人としてどのような方針を立てるか、相手方からどのような反論が想定されるかを考え、調停委員がどのように手続を進めさせるかを予想するなどして、最後まで関心をもちながら読み進めることができました。

また、本書では、裁判官と調停委員との評議の内容や手続選別（インテーク）の運用等も対象とされており、通常の弁護士業務では触れる機会が少ない裁判所の実務について理解を深められる点が大きな魅力です。

(2) 充実した解説等

解説部分では、実務上重要な点がポイントとして明記されるだけでなく、前提として整理すべき知識が表にまとめられ、資料の収集方法についても解説がなされる等、読者が実際に案件を進める上で必要な知識を身に着けることができるように工夫がなされています。また、本書には各エピソードの事実を基に作成されたモデル書面（書式）が豊富に掲載されており、参考になります。

コラム部分では、実務上の応用的な問題に言及がなされており、より深く家事事件の実務を理解するきっかけになります。

なお、解説部分とコラム部分は、枠で囲まれており物語部分から独立していますので、必要なときに素早く情報を参照することが可能です。

3 おわりに

本書は家事事件の実務について理解を深めるための良書ですので、これから家事事件を扱う新人の方はもちろんのこと、より高度な事件解決を目指される中堅からベテランの方にもぜひお手にとっていただきたい一冊となっております。